

平成 27 年度 川崎市多摩川プラン推進会議 部会

議事録

■開催日時：2015 年（平成 27 年）7 月 28 日（月）10：00～

■開催場所：川崎市役所第 3 庁舎 1 5 階 第 1 会議室

■出席者（敬称略）

委員長	進士 五十八	東京農業大学 名誉教授
委員	齋藤 光正	NPO 法人多摩川エコミュージアム代表理事
委員	寺尾 祐一	NPO 法人多摩川干潟ネットワーク副代表

■議事録

1. 開会
2. 部長あいさつ
3. 委員長あいさつ
4. 議事 ー川崎市多摩川プラン（素案）についてー
 - (1) 目次について
 - (2) レイアウトについて
 - (3) その他

委員長あいさつ

【進士委員長】 多摩川でいえば、源流にどれだけのサポートをできるかという、一種の大都市の責任というのを意識しないと、新しい時代のプランとは言えないとまず思っています。単に隣り合っているから広域行政をやりたいというのは、それは昔から言われていた。自治省がずっと進めてきたんです。

そうじゃなくて、人口100万、200万も持っているところが、ほんの数十人しかいないような集落に源流域があって、その源流のおかげで川が流れているわけだから、そこをちゃんとサポートしなきゃいけないというのは、企業でいうとCSRで、地方公共団体もそれをやらなきゃいけない時代だと僕は思います。

ですから、今、僕がずっとこういう改定のときに意識するのは、なぜ改定したか。そして、改定した意義がほんとうに大きかったか、社会的評価ですね。ですから、細かいプランのディテールは、行政の皆さんが毎日やっているんだから、かゆいところに手が届くようにちゃんとやれる。こういう会でやらなきゃいけないのは、そのチェックなんですね。

だから、今回もそれを1つ強く意識しなきゃいけない。単に多摩川を取り巻く流域の自治体同士で交流しましょうねというのは、ご近所つき合いということでしょう。それは社会的貢献とか高い思想性じゃないんですよ。

横浜は昔からそれをうんと大きく打ち出してきたんです。川崎はそれほどの観点を持っていなかった。ですから、そこをちゃんと今回、この時計文字のV番でもうちょっと強化する。それが1つ。

地球の半分は女性が支えているという言い方をしながら、女性の職場は極めて狭くて、そしてせっかくやる気になった女性を生かし切っていないというのが日本の社会だというのはみんな知っている。

でも、それは男女共同参画の部門がやっていることで、ほかの部門は関係ありませんという顔をしてやっている、大体どこの職場も。そこをよくよく考えると、女性のいろんなキャリアを積んだ人が結婚したり、子育てしたりして家庭に入ったとしても、また社会へカムバックできる、あるいは社会参加できるような人生設計をやれるというのは、どうやったらいいか。

あんな元気な人がいて、水辺の楽校のはしりは結構彼女の力が大きかったね、川崎の。つまり、ああいう人を上手にずっと使い続けるというか、生かし続けているかというか、川崎のような首都圏の一角にある自治体は相当有能な女性がいっぱいいるはずですよ。

【事務局】 います。

【進士委員長】 ねっ、住民の中に。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 それを発掘して生かすことと、もうちょっと言うと、地方創生絡みで言うと、それがあある種の経済にならないといけない。つまり、彼女たちが収入を得なきゃいけない。これは大きな給料を払うというわけにはいかないが、それこそ里山資本主義的な給料ですよ。つまり小遣いと、自由に使える金ができて、子供と一緒に遊んだり、周りの仲間たちとやれるぐらいの、そういうのがこういう河川の事業、多摩川プランの事業の中で位置づいて、それによって市民の何人か、あるいは女性の何人かが、雇用のチャンスというところとちょっと大げさだけどね。

今まで齋藤さんでも寺尾さんでも、基本的にはボランティアもしくは有償ボランティアの範囲。これを徐々にでもしようがないんだけど、徐々に、やっぱりそれがあある種のスペシャリストとしてね。僕は地方のこともやっていて言うのは、都会でいえば、僕も『グリーン・エコライフ』にそれ書いたんだけど、半農半漁という言葉が昔からありますね。半分は農業をやって半分は漁業をやる。昔は農業だけで食えない、日本の海岸線の農地の狭い地域では。だから漁師の仕事と棚田ぐらいの米、両方で一人前だったんですよ。

今のサラリーマンも、例えば市役所半分で、趣味で何かボランティアやって半分で、でも、あれは有償ボランティアだから多少小遣いはくれるという形になれば、両方やれるね。つまり、1人の人生が2つとか3つやるという。人口はこれから半減しますから、そうすると、1人が2倍か3倍いろんなことをやらないと、社会全体が持たないということでもあるんですね、大きく言うと。ですから、そういうふうにと考えると、何かそういう仕掛けを多摩川プラン絡みで上手にどこかへ仕掛けられないのか。

今、あそこの齋藤さんのところのセンターは、あれは委託費でやっているんですか。

【齋藤委員】 委託です。

【進士委員長】 人間の創造性というのは、物を考えるというのは、そういうビジネスもつくる。それは1つのクリエイティビティーだからね。ま、補助金をもらっていたら、それに使ったりやいいってものではないのは事実だけど、ただ、今までのそういう委託のやり方は、行財政上のつまり締めつけがああって、直営でやっていたよりは安くしたいからって、コストダウンのためにやるというのは邪道だね。

より活発になるために、指定管理者で民間からとか市民のNPOをお願いするというの

はいいと思うんだけどね。元気にするために。

ともあれ、僕は全体像で急いで今幾つか申し上げたことは、多摩川プランみたいな設置型の施設整備とか管理とか、そういうフィジカルプランでは足りないなということをお願いしたい。つまり、今の時代の要請に応じて、少し先の社会のありようを考えて、そういうものに提案できるような内容があるなど。そこが、ちょっと別の全く邪道な話をすると、日本水大賞とか、そういうものを獲るするには、そういう観点が抜けていると、逆にどうしようもないんだよ。

僕はいつも審査員側に回っているから、評価のポイントがないとだめなんだよ。これは非常に先見的な取り組みであるとか、新しい時代の要請にいち早く応えた新システムを確立したとかというのがないと、だめなんですよ。去年と同じように、去年やったのをもうちょっとよくしましたって、少しずつ改善型でやっているというだけではね。だから、少しそういうことまで意識して、最終仕上げに行ってほしいということです。

今回なぜ改定かということの1つの切り口で今のことを忘れないでほしい。女性の参加とか、源流、上下流の問題とか、そういう社会性を持って、できれば、社会がどんどん今変わろうとしていますからね、雇用の形態から何からいろいろ変わろうとするときに、いわゆる職業を持っているとか、サラリーをもらっている人と、無職でホームレスやっていますみたいな、両極端じゃなくて、中間に幾つものありようも認める、僕のライフスタイルダイバーシティの考え方はそれ。いろんなありようがあっている。

ただ、若いころは100%給料もらわなきゃやっていけないでしょう、ボランティアじゃ。だから、そういうときはちゃんと社会がそれをやってね。だけど、リタイアメントの後には、維持管理すればいい。建設するという時代と維持管理とは違うんですよ。都市も発展過程があって、インフラの整備がほとんど終わっていたら、あとは維持管理なんですよ。ヨーロッパ社会があんなに働かなくて、バカンス2カ月もやっても持っているのは、あれは全部ストック社会だから。

ヨーロッパの建物は石でできているから、300年前のやつを中だけリニューアルして、リフォームして使っているからですよ。だから、すごいイニシャルコストがかかっていない。ランニングだけなんです。日本は、私もそうだけど、3回も4回も自分の家をつくり直しているわけ。たまんないことをやっている。それは、いつでもフローなんだ。

だから、日本もようやくストック社会に入りつつあるんだけどね。そうすると、ちゃんとしたストック社会になれば、人口が減っても維持できるわけです。今までの経済の膨ら

み方というのは、そうやって、みんながスクラップアンドビルドで、壊しちゃ、つくって来たから、それが経済を動かしてきた。高度成長もした。

だけど、それをやる原動力もないんだよ、人口が減っているんだから。そうすると、やっぱりランニングだけする。つまり、ちょっと動かすというかな、レールに乗せれば、少しやれば慣性の法則で走るでしょう。どうやって低成長社会で持続可能な地域のマネジメントがやれるかという話にしなきゃいけない。

今、例えば、大丸あたりでエリアマネジメントというのをやっている。皆さんも知っているでしょう。東京駅の周りをやってきたんだけど、もうそれぞれのビルで街を管理しない。まず千代田区ももう管理能力がなくなっている。千代田区は住民がほんとう減っているんですね。みんなビルですから。夜間人口ないんだよ。夜間人口は守衛さんぐらいしかいない。守衛も通勤しているとだめだし。

だから、千代田区は区役所職員を養い切れないぐらい、ぜい弱化しているんですね。それで、再開発に伴って住宅の附置義務をつくって、とにかく何人かを住まわせないと、ビルの開発は認めないみたいにやって何とか住民を確保しているわけです。だから、大都市だからといって、自治体行政もずっと永続しないんですよ。川崎はまだ人口が伸びてくるんだから当分そういう心配はないけど。だから限界集落って話は山の中だけで起こっていると思っちゃいけないんですよ。つまり、そういう時代になったときにどういうシステムにしとかなきゃいけないかというので考えなきゃいけないんですね。

でも、昔から川が、例えば相模川があって厚木という街は生きてきたんですね。相模川の舟運で厚木市というのは生きてきたというようなくあい、多摩川だってそうだったと思うけど、大きな川は交通幹線で、流域に人が張りついて生きてきた。そういう意味では、人間が生きるという経済活動、生活行為と自然環境というのは深く結びついてきたので、今はそういうものがほとんど意識しないで、専らこういうレクリエーション利用とか自然環境の保全とか、言ってみりゃ稼げない話だけでプランをつくっているわけ。そうでしょう。プランナーもそういうのでなれちゃったから、もう忘れちゃった。

だけど、根っこに経済がないものは持続しません。デフレーション、遊びとか環境保全だけのプランをつくっていたら持続しないんだよ。だから、ほんとうはどっかにその要素を入れていかなきゃいけない、ほんとうのプランを。そうじゃなければ、ほかで稼いだ金を持ってこさせるしかない。それを持ってくる金が減って、今、コストダウンを図っているんですから、多摩川プランは、そういう意味では、生きていける要素、少なくともそ

ういう側面も意識したプランに少しはするということですね。だから、これのマネジメント、最後の多摩川プラン、新多摩川プラン推進のためにという、こういうところにだってそれがちょっとちらちらと見えたりね。事務局と相談しまして、今度の新多摩川プランというふうにしようとして一致しました。これまでのがありますので、旧と新を分けないとね。

今、私が冒頭で申し上げた幾つかのことは、今までのプランとは違う新しい時代のプラン、そしてできるだけアピールできるようにしようという気持ちがあるから、今、私も言ったわけです。だから、予算をもらってきて、予算を消費するという話だけじゃなくて、少し生み出すほうも考える。あるいは、ビジネスなんていうのは環境のプランにはあり得なかったんだけど、そうじゃないでしょう。人間社会が持続するには雇用とかビジネスということも無視はできない。だから、大金を稼げるという話じゃないが、つまりマネー資本主義ではないが、里山資本主義程度の金の話はできるだけ散りばめていくということですね。わかりますよね。

ですから、そういうのをお2方に、新というのをつけたのはその狙いです。新がないなら、ただの旧のプランの改定というか、一部、部分修正でいいんですからね。それをわざわざ改定するというのは、やっぱり今までのプランを総点検して、その上に新しい課題と新しいチャレンジを考えて、そしてステップアップする。そういうイメージを発信しよう、そういう意味で新とつけましたので、それを前提にこれから説明を聞きます。

どうぞ。

以下、事務局による資料確認、説明

川崎市多摩川プラン素案について

【進士委員長】 計画対象範囲は、源流まで考えるという話をしているんだから、計画と事業整備、整備事業とか、それは違っていいんですけど、そこを区分けしながら書かないと、計画対象、相変わらずこの河川敷ですみたいなのはまずい。

【事務局】 7つの基本目標から5つに変えたプロセス、こういう意見が出て、こういうふうになりましたというのをここで記載をさせていただいたんですけど、できましたら、この本体に入っている部分はかなり簡略化して書いてあるので、そこについて少し工夫をしたいというふうに考えています。

【進士委員長】 これは参考じゃなくて本文に入れたほうがいいでしょうね。

ただ、多摩川プランと新多摩川プランの関係とか、ちゃんとこの図の意味するところを考えたほうがいいですね。

【事務局】 はい、わかりました。

【進士委員長】 それでは、皆さんから全体的なところからまずご意見いかがでしょう。まず、齋藤さん、何か。根本的なところで気になるところ。

【齋藤委員】 今気がついた点で言うと、2ページのところ、1時間の降水量50ミリというのは、川崎市ではまだ記録がないんですよ。瞬間的には80ミリぐらいありますけど、50ミリには記録がないんです。50ミリが1時間続くとすると、二ヶ領用水があふれちゃうんですね。今、上河原の堰の上の堤防はかなり嵩上げしましたがけれども、あそこも危なかったんですよ。でも、それでは50ミリじゃないときだったんです。

だから、50ミリというのをイメージするとしたら、何か、今、イメージできないと思いますね。子供たちには、50ミリというのはこのぐらいの量だよということを、せせらぎ館に来たときに、水位はどこまで上がるか、今までの経験としてはここまで水が来たんだよという程度の説明なんですね。

だから、防災を含めて、どのぐらいまで水位が上がるかというのを何か、数字だけではなかなか理解できない。非常にいい表現なんですけれども、川崎、この辺での経験がありません。

【事務局】 部分的には50ミリ以上降っています。

【齋藤委員】 瞬間的にはしている。

【事務局】 そうです。はい。

【齋藤委員】 でも、1週間続けてはしていない。すーっと消えちゃうから。

【進士委員長】 改定の背景として、このデータを入れたのは何が狙いなのか。

【事務局】 今、自然災害は集中豪雨ですとか想定外豪雨が全国的なレベルでどんどん増えていますよというのを記載させていただいています。

【齋藤委員】 そうですね。

【進士委員長】 防災上の取り組みが今後必要高まっていると、それが言いたいの。

【事務局】 そうです。

【進士委員長】 下にあるのは、人口推計。

【事務局】 これは少子高齢化の話を載せています。

【進士委員長】 だからさ、改定の背景が、何かだらだらいっぱい書いてあるけど、何

がポイントかをちゃんとわかるように書いたほうがいいよ。だからこのデータがあるというふうにしなないと。ね。だから何もさ、雨量の話は全国的な話で、今、気候変動の話だから。気候変動がもうこんなに激しい、ほんと最近誰でも実感しているわけだよな。それについて言及するのはとても大事だし、今、齋藤さんなんかデータで言うのもいいけどさ、これだけぼんと並べても、何言いたいかわかんない。人口の問題と雨量の問題は違うんだもん。ね。だから、幾つかの側面があるんでしょう。天然、自然現象の話もあれば、社会の変化、地域社会の変化もあるんだから、ちゃんと柱立てて。

僕から言うと、プランの改定の目的とこれまでの評価、目的、背景、それからこれまでの成果、これが淡々と来ればいいのね。むしろ、今後のがぐっと来なきゃいけない。だから、こんなに前で全部誇っちゃっているなら、やらなくていいよと。けどさ、多摩川プランのこれ重点プロジェクトの話、まだ全然この段階で出てきていないんだよ。

【事務局】 はい、そうです。具体的なものは後ろのほうで、イメージ的にいいものを、こういうふうになったほうがいいようなものをどんどん出してほしいというふうに私どもは言っています。

【進士委員長】 目的っていうのは、目的と背景で説明して、新プランが必要だという話にすればいいんだよ。とにかくね、前にあんまり入れないこと。全部入っているなら、もうやらんでいいんだもん。わざわざこの計画を持続する、計画っていうのはずっと持続させるもんだって前提に君らは立っているけど、行政の計画というのはほんとうは完了したら終わるべきなんだから。僕が議員だったらそう言うよ。

だから、市長も変わって新しい夢も持っているし、今までのやつも積み残しがいっぱいあって、まだまだ重要なことがあるので、やるんですよ。そこを自覚しなきゃだめ。だから、後ろで夢が膨らむのはいいよ。前からこんないっぱい並べたらだめだよ。

一番悪いのは新プランの絵だよ。5つの理念にイラストが入っていたでしょう。これ。14ページから。自然と調和した美しい多摩川、多摩川を知り、災害だろう。きのうの調布飛行場みたいのがあって。何でこれ、こんな絵1つずつで表現できる？もっと多面性があるでしょう。目標ってのはさ、目標に過ぎないんだよ。目標は抽象化された概念なんですよ。だから、1枚の絵で示しちゃだめなんだよ。みんなの暮らしに寄り添うのは、何だい、こんな、やっぱり法面はコンクリート張って、こういうつまらない川が目標なのかと思うよ。それから、子供をはぐくむのは、何、これ水槽見ているっていう、これは寺尾さんのところかな。

【寺尾委員】　　そうです。

【進士委員長】　　これだけかよっていう。場の創造だろう。場は水槽を置くのかって。もっと水辺そのものに子供が出ていって楽しくやるんでしょう。あるいは自然体験するんでしょう。最後につながり深めるのが渡しの再現かよ。違うでしょう、位置づけが。

だから、今の役所の発想はみんなそうなんだよ。市民受けしようと思ってね、受け狙いばかり考えるんだよ。絵を入れればとにかく喜んでくれると思っている。計画ってのは、もっと本質的なものですよ。プランニングっていうのはフィロソフィーがあって、ちゃんとしたポリシーを並べて、それで具体的な事業がイメージできる計画というのを並べて、それが実現できる方策を述べるものなんだよ。行政にとって最も重要な、個別の事業より最も重要なことをやっているんだよ。それを、エモーショナルにイラストだの何だのっていうことをやって、目くらましをやるという、だめだよ、それは。計画行政というのを忘れてるんだよ。

これつくるほうもそうだよ。考えなきゃ。今、何でも受け狙いでね。ビジュアルな情報がどっからでもパソコンでやれるものだから、やたら組み合わせるんだよ。最近が多摩川のやつをやっているのにドナウ川を持ってくるかもしれないんだから。そんなばかなことをやっちゃだめなんだよ。めり張りをつけなきゃだめ。全体に同じように入れるんじゃないんだよ。計画の中身のところでやる。もう1つね。

それから、次の17ページからの目標と推進施策のところは、例えば、18ページのは2項、2つだね、事業が。19ページは10個ぐらいあるね、事業名が。これ、バランスが極端に悪いね。それは平等にしなきゃいけないってものじゃないんだけどね。体形というのは、やっぱりほぼほぼ量がそろっているというか、でないなら、それは何か吸収されていいかもしれない。金額も大きいのかもしれないし、わかんないけど、一個一個点検していないから。ちょっと見た感じ、これはどういう分け方なの。

例えば、河原風景の保全と書いてあるでしょう。河原風景の保全というのは、堤外地だけを意識しているのかな。

【事務局】　　そうです。

【進士委員長】　　河川敷だけだな。

【事務局】　　はい。

【進士委員長】　　だけど、多摩川プランの風景は沿川を全部入れているんですよ。むしろ多摩川プランは全部、全市域入れているんだから、計画対象は。当初からそうだよ。ね。

だから、多摩川の堤外地だけやるなんていうのはもってのほかだよ、風景の保全というの
は。

風景の保全は、むしろ流域が開発されているんだし、民間が張りついて、企業も張りつ
いて、公共施設もあるんですよ。何で多摩川風景の保全が、これが自然環境の保全という
ならまだ納得いくけどね。それでも多摩川の場合は河畔林があるんで、堤内地側の河畔林
とか、あるいは等々力緑地のような緑地とか、もっと連続して捉えなきゃいけない。そう
すると、もうちょっと変わると思うね。

【事務局】 先生がおっしゃるのは1と3と5ですね。それが全部合わさったものが、
先生のおっしゃった河原風景の保全と水系・緑地のネットワーク、そして多自然川づくり
の推進。

【進士委員長】 ここに書いてある実施事業は、これまで各部門でやっていただしてい
ることを並べているんでしょう、多分。

【事務局】 そうです。前の多摩川プランの中で推進している事業。

【進士委員長】 そうですね。既存施策でしょう。

【事務局】 そうです。

【進士委員長】 そこもちょっと、それだけでやろうとすると、おかしいんだよ。だっ
て組みかえると言っているんだから。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 だから、その考えの前提が崩れているのはなぜかという、第2章な
んですよ。第2章で川崎っ子プロジェクトとか、成果を誇れると僕はこの間言ったけど、
これだところがプランのイメージをつくっているんだよ。さっきみたいに旧プランはもう
終わったんですよ。移行させてから、これから充実するほうはいいんだけど、成果を誇る
のはいいんだけど、こんなに大きな、これはそういうことで仕事したほうが悪いのかもし
れん、みんなで行こう多摩川プロジェクトって、これ成果が上がったのはもういいんじや
ないのって、新プラン要らないんじゃないのと思うでしょう。ね。だから、川崎っ子プラ
ンと生命の再生プロジェクトとみんなで行こう多摩川プロジェクト、これ前の、これは何、
まとめたのか、これは。前の7つか幾つかの目標というのは、この川崎っ子とこの3つは
何だよ。

【事務局】 リーディングプロジェクトの成果を取りまとめたものです。

【進士委員長】 だから、成果を取りまとめて、3つにはっきりしちゃったの？ 3つ

の柱になっていたのか。

【事務局】 3つの柱です、もともと。

【進士委員長】 もともと。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 で、みんなで行こうというのをさっき言っていたじゃない、今度の新しいプランで。今、細かいことはいいんだけど、これからのプランのところ、重点プロジェクトは行こうというところですねと言わなかったか。

【事務局】 そうです。前は楽しむという部分を含めて、みんなで行こう多摩川。

【進士委員長】 いやいや、細かいことじゃないんだ。今、僕が指摘しているのは何かわかっていないな。旧プランと新プランの大きな違いを聞いているわけだよ。今、何を指摘しているかという、旧プランの成果が、移行というのがありますね、子供の教育もありますねといったら、何も変わらないじゃないかと言っているんだよ。このつくりが悪いと言っているんだ、つくりが。全部旧プランの成果のところ、これをやりました、これをやりました、これをやりましたと言っ、でも、プランの改定が必要です、新プランですと言っているんだろう。そして、その重点プロジェクトがまたこれとこれとこれですと言ったら、どうなるよ。論理的にもおかしいでしょう。それを言っているの。

【事務局】 そういうことがあったので、前回のリーディングプロジェクトのイメージが、個別事業をこういうふうを選んでいきますよという形で、例えば、最初にマラソンコースをこういうふうにやっていきますよというふうに、個別事業をピックアップするプランとして、うちのほうで皆さんにお話を差し上げていたんですけど、前回、先生とお会いしたときに、やっぱり何かで束ねて、重点プロジェクトというのはやるべきだと。

【進士委員長】 束ねるのは37ページを束ねるの。それは正しいの。今、僕が言っているのは前の話をしているんだよ。成果のところを大々的に、やったことは成功、これだけやったと誇れよと言ったよ。だけど、この5ページ、6ページ、7ページ見てごらんよ。これとだよ、この5、6、7と、今の37ページで言っているのが重なり過ぎますと言っている。重なったら、新プランは要るんですかというの。僕が委員だったら。これまで終わっているのね、ここまで。こんなに成果も上がっている。できたんなら、もういいんじゃないの。

【事務局】 それをちょっとまとめてと言われたときに、いくら考えても、前回のリーディング・プロジェクト自身しっかり考えたものだったので、重なった部分の取りまとめ

しか、正直言って、できなかったんですね。それで、この37ページのところでも、タイトルがちょっとつきにくい。タイトルをつけると、前と一緒にになりそうだったので、非常にそこでもずっと悩んでいたんですけど、そういうことなんですよ、それが実際の話として。ですから、今回は、ほんとうはそういうふうにまとめないで、何とかというふうにまとめないで、1つずつの事業を重点プロジェクトとして挙げようかなと思っていました、当初から。

【進士委員長】 だって、これ、まとまったものが37ページ。

【事務局】 そうです、そうです。これ、前回、相談した際におっしゃられて、重点プロジェクトというのはやっぱりまとめないとおかしいよとおっしゃられたので。

【進士委員長】 重点とリーディングは違うんだけど、リーディング・プロジェクトと言うときはまとめなきゃいけない。リードするというのは、1つの事業をやるんじゃないんですね。それによって全部引っ張ろうというのがリーディング・プロジェクト。重点というのは、それだけやってもいいんだよ。そこは、だから、今、全体で来たから、じゃ、僕が言っているのかもしれないけど、じゃ、どっちで行くかだよな、逆に。

【事務局】 そうですね。

【進士委員長】 重点って、個別の重点だけやるのか、あるいはもっとプライオリティーつけて、順番つけちゃうか。

【事務局】 そのほうがはっきり出るのかなと。

【進士委員長】 それなら重点プロジェクトと言わないでもいいね。プロジェクトの進め方と言って、これだけたくさんのことがあるんだけど、効果的で意味のあるのがこうだからとか、あるいは逆にグルーピングして、3つとか4つとか5つとか、完了とか未了とか、それをバランスよくやりますというふうに書くとかね。だから、事業名が具体的に全部並ぶんなら、その事業名一覧をして、その進め方を書けばいいかもしれない。最後の言葉は。だから、先入観があり過ぎるのかもしれない。計画というのは自由自在なんですね。重点で行くのか、リーディングで行くのか。それも、個別事業をここで決めてしまうのか、随時、多摩川施策推進課という課まであるんだから、そこで適宜、市民のにニーズとか事業の進捗状況を判断しながら、より効果的、有機的に結びつけながらやっていきますよという方法論、方向性を示しておけばいいのかな、そういうことだ。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 じゃ、もうこれは重なるわけね。旧プランで大体もういいのね、ほん

とうは。

【事務局】 いや、ちょっとそこで一番悩んで。

【進士委員長】 いや、だから多分ね、枠組みはいいんだと思う。だけど、中身がもうちょっと足りないというか、対象地域が昔3つを挙げただけで、もっとさらに4つ、5つ、くっつけなきゃいけません、ほんとうは7つやらないと全市的じゃないとかね、そういう話で旧プランが要るということも考えていいわけですね。

それから、さっきの話で、条令とか、広域行政で行かなきゃいけないとか、そういう展開を強調するとか、それでいいけど、じゃ、成果の上げ方は、このビジュアルにこんなにやったということは、これね、川崎っ子プロジェクト、この字が大きいな。これがどうもね、もう計画いいんじゃないの、これでっていうイメージあったりする。成果のほう入っちゃっているから。これからやらなきゃいけないことが、このぐらい派手に出てくれなきゃのに。

【事務局】 わかりました。

【進士委員長】 終わっちゃったやつがこんなに出てきて、こっちのほうは何もないというのはだめなんだよ、報告書のつくりとしてな。そこのところ、最も重要な、今言ったように全体のバランスを僕は考えなきゃいけないからね。

それから、さっきの説明でよくわからなかったのは、9ページの現況の話ね。これは、水質がよくなったとか何とかという話は、このプランの部分的な成果でしょう、これ。極端に言うと、生命の再生、行こうとかっていう並びに、そこのどっかにね、この3つのグルーピングじゃないんだけど、その他、顕著な成果というふうに挙げるケースでいいんじゃないの。さっきの事前の説明では現況だというけど、現況にしちゃ、このぐらいで現況と言われちゃたまらないので。

【事務局】 3つの重点プロジェクトの中に載っていないメニューだったので。

【進士委員長】 そうでしょう。

【事務局】 実際は、10ページに示しています多摩川の再生のシンボルのアユが、こちらちょっとわかりにくいんですけど、17年のときはこの部分すごく少ないんですね。100万匹よりも全然、たしか55万匹だと思ったんです。

【進士委員長】 すぐ細かいことに入るな。僕はそんなこと聞いていないんだよ。ね。それ成果で挙げたいんだろう、どうしても。

【事務局】 現状はこうなっていますよという。

【進士委員長】 いや、現状というか、成果に挙がったんだよね、それは。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 だから、生命の再生でしょう、それは。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 生命の再生に入れりゃいいじゃない。何でアユは別なの。2-3-2に特別出さなきゃいけないの？ 生命の再生の一部じゃないの、それは。

【事務局】 そうです。

【進士委員長】 そうですね。いや、だから、下水道の普及というのも何か変なんだけど、下水道の普及は多摩川プランじゃなくて、下水道のプランでやっているんでしょう。だから、下水道の普及じゃなくて、水質の向上を言っているんでしょう。

【事務局】 そうです。

【進士委員長】 大事なんでしょう。成果なんでしょう。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 だけど、それは水質の向上は、この3つのどこになるの。生命の再生なのか。この1、2、3のどこに入るの。

【事務局】 2ですね。2の生命の再生。

【進士委員長】 じゃ、そこに入れちゃいなさいよ。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 あるいはもう1つのやり方は、①②③とあって、③はみんなで行こうでしょう、7ページが。8ページに、その他、多摩川プランによつての成果というので、もっと言いたいことをいっぱい整理するのが1つだよね。だけど、多摩川の状況の変化っておかしいよ。

それから、多摩川プランの評価というのは、これ総合評価ということかな。ただ、赤と緑と黒の区別が、ちょっとイメージが違うんだけどね。赤というのは、赤は危険だから、これからさらに課題があるということじゃないの。黒は全部終わっちゃったとか。いや、意味がわかんない。

【事務局】 色のつけ方がちょっと違うんじゃないかということですか。

【進士委員長】 うん。それとS、A、Bというのは、これも前にやったんだから評価はいいんだろうけど、これの問題は新プランとの関係なんだよ。さっきの説明だと、これはみんないいんだけど、みんな必要だという話ね、今後も。だから、これを完了したから、

もうこの赤は次の新プランでは出てきませんという話じゃないんでしょう。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 じゃ、どういうふうに、旧プランから新プランにこれを生かしているのかと。ね。PDCAサイクルなんていまだ、あんな古いことに向き合わんほうがいい。だから、チェックしたら、次にまたフィードバックするということなんだから、少なくとも8ページのこの表は、旧プランの総合評価をしましたと。そこで残っている課題はこれで、次のプランに引き継ぎますとか、より発展的に評価しなきゃいけないとか、あるいはこの事業、34番なら34と、1つ書いてあるけど、これは34のAダッシュ、Bダッシュ、Cダッシュぐらいにもっと事業名を増やして充実しなきゃいけないとか、何かそういう話がここないと、何でここへこれを入れたかという意味が、新プランには反映していない。これを完了しちゃいけないんだよね。ここの位置づけ、ここを考えてみてくださいね。

それで、あとは先ほどの新プランの12ページの書きぶりで、何かさっき、何だっけな、書きぶりを何とかかんとかって言わなかった、説明で。

【事務局】 12ページですね。前回の文言をそのまま書いていまして、そういった部分ですね。

【進士委員長】 それはだめね。大改定して、さっき僕が前段で言ったことも含めて、それから市長のあれとか、もっとそういうことをきっちり入れないとだめ。書き直し。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 13ページはさっきの後ろのやつを入れると。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 僕は、ここでは基本目標は、時計文字でⅠ、Ⅱ、Ⅲのこの言葉でいいと思う。ただ、もし言葉のところに、過去の旧プランでやったことや、さらに課題で残したことや、そして十分配慮しなきゃいけない、今後、むしろそこへ十分留意してやりましょうねという話とか、それで、後のところで言うと、プロジェクトに並ぶような言葉の一部を散りばめるのはいい。この3行や4行じゃ基本目標と言うのは恥ずかしいと思って、絵を入れて水増ししたんだらうけど、そういう姑息なことをやらないで、ちゃんと自然と調和した美しい多摩川づくりというのは何なのか。これまでここまでやってきて、これが残った課題で、さらに新しい要請がここにあって、ここまでしなきゃいけないという、ちゃんと、まさに理念らしく。

【事務局】 説明文をしっかり書いて。

【進士委員長】 うん、説明ということです。理念そのものだから。

【事務局】 それとあと、言葉の圧縮した、例えば環境ですとか、そういうことの中に大きくわかるように。一言で合わせられるように。

【進士委員長】 うん。とにかく新プランの目標ですから、それがここだけ読んで、自然と調和した美しい多摩川にしまきゃいけないんだと、新聞記者でも何でも読んだらわかるように、だから場合によっちゃ、あまり複雑じゃいけないけど、シンプルなデータとか変化の資料とかは別に入ってもいいんです。

あのね、この目標のところがとても大事なんだよ。役所の人はこういうのをほんとに簡単に書いて、いきなりこの1から30までの17ページみたいな事業名が並んじやうんだよ。ね。だから、13ページの目標というのはフィロソフィーなんです。そして、それを第三者、つまり市民とか企業とかの関係者に十分に伝えないとだめ。政策の狙い目をちゃんとわかってもらったときに、政策の実効性が上がるんだから。ここ、とても大事な文章なんだよ。

ここ、こういうふうが一番簡単に書くんだよ、みんな、さらっと。それはある意味でわかりやすくって言われるものだからと思っているんだろうけど、わかりやすいということと、いいかげんでいいということは違うんだ。本質がちゃんと入ってわかりやすいものが正しい。だからこれ、13ページから16ページはとても大事。この写真でごまかすようなことは絶対しちゃだめ。絵は要らない。目標ですから。イメージだから。頭の中に。総合的、多面的なんだから、1つの絵でやったらもうそれで急に矮小化しちゃう。ね。

それで、17ページ、これレポートつくってカラフルにすりゃいいってもんじゃないよ、品がないよ、これ。17ページ。

【事務局】 すいません。レイアウトで、ここでこういう形、上に合わせてですね。わかりやすくするために。

【進士委員長】 合わせたいなら合わせてもいいけど、緑になったり、黄色になったり、青になったり、これ序列が何もないじゃない。グラデーションでちゃんとやるとか、もうちょっとさ、秩序ってのを考える。計画というのは秩序が大事、オーダーが大事なんだ。ね。

で、この1、2、3、4は、時計文字でしようがないけど、さっき言った絵の扱いと、後できちんとして。だって、これ、グリーンという、何か意味があるの。これは自然だか

らか。災害は黄色か。寄り添うのは、でも、赤ってのはないな。災害が赤ならわかるけどな。子供は何だろうね。希望の光か。よくわかんねえな。つまり、イメージカラーってそういうものだろう。適当に区別するためだけじゃないんだろから。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 基本的にあんまりこんなことはやらんほうがいいと思う。色でやるというのは。カラーコピーが発達したからなんだよ。ほんとと惑わされているんだよ、機械に。

【事務局】 すいません。

【進士委員長】 コピーして配るときには、このVの濃いブルーは見にくくなる。そういうことまで考えないと。だったら、これは白抜きにしなきゃだめ。例えばけどね。もっと丁寧に考えなきゃだめ。

いずれにしてもね、あんまり商業、商品じゃないから、印刷するときにはまたちょっとエディトリアルデザイナーにやりたがるだろうと思うけど、このレベルではね、もう思想がしっかりしているというのが大事。質の担保が。

18ページ。さっきの地域の流域、堤内地のことをもうちょっと強調して、さっき言ったように、3つ組み合わせたほうがいいかどうかとか、ちょっと考えてみて。それぞれの個別事業はきょうやりませんから。きょう一番大事なのは骨格だからね。むしろ逆に齋藤さんとか寺尾さんから、これを見てもらって、ここにもっとこういうことが必要だよってヒアリングして、入れたらいい。

【齋藤委員】 後でちょっと。

【進士委員長】 うん。ぜひ言ってください。災害だったら、これが一番、こういうのがなきゃだめなんだよと。これ、今までの案を並べたんでしょう。新しいものを入れてあるの？

【事務局】 新たにやるものについては、ここで事業名としてはっきり載っているのはほんとうにやりますよというものだけなので、イメージが入っていれば、違うところへ入ってくる可能性はあるんですけど。

【進士委員長】 これは庁内の各課との関係だから、ここで決められないのか。

【事務局】 そうです。はい。

【進士委員長】 じゃ、それは網がけか薄い字で入れて、相手の部局に対して説明できるから、委員会ではこの議論をしているんだけどと言って、じゃ、まだ網がけで決定じゃない、そちらが了承してくれなきゃ入れられないんですけどというのでいいから。でも、

入っていないと議論にならないじゃない。だから、ちゃんととりあえず計画を策定する部門として、つまり皆さんのところで、これはこれも必要だと。今やっつていようと、やっつていまいと、入れるべきものは入れて、さっきも言ったように、ほぼ5つとか、5つか8つぐらいの範囲でちゃんとそれぞれの項目が成り立って、それがそれぞれの4とか6というのにふさわしいなど。その全体でのイメージが事業名にちゃんとついているというネーミングと、それをチェックする。

今ずっと各事業、そのバランスね。ただ、さっきの話は触れないようにするなら、柱で、そういう言い方をするのかどうかというのをもうちょっと組み立てを考えなきゃいけない場合もあるな。

それから37ページはさっきの話で、行こうとか学ぶとか楽しいとかそれはちょっともう初期段階の計画のキーワードだね。そういうのはね。知るとか学ぶとか、それもそう。楽しむだの、来ませんかみたいな、そういう少女文学みたいなのはだめ。第2次計画になったら、もうちょっと骨太のでなきゃいけない。

そうすると、重点プロジェクトというのか、リーディング、重点はほんとうに大事なものの、絶対これやらなきゃ多摩川プランの精神が発揮できないというのが重点。

それから、リーディングはみんなを引き寄せて、一緒に持っていこうという。だから、普通はハードをやりながらソフトも入れちゃうとか、ソフト中心なんだけど、そのときについでにハードも入れますとか。リーディングというのは牽引するということですからね、引っ張っていく。だから、一番有効な引っ張り方なんです。

だから、例えば河口の開発のときに、じゃ、再開発地域をリーディング・プロジェクト。そのときは考えるだろうし、河原の保全も考える。これが本来のやり方。

例えば、研究開発拠点だとするじゃない。研究開発拠点のときに、今、多摩川プランでも富士通の何かこんなことやるのが植生調査とかつながっているでしょう。つまり、ああいうふうに無理やりでもいいから結びつけて、多摩川河口部の自然環境の保全のようなものが新しいある意味の環境研究とか環境ビジネス、環境技術開発だとか、そういうエコ技術につながるような拠点にしましょうという、組み立てにするとか、環境負荷を最小限に抑えるような、そういうものにしましょうとか、そういうふうに考えないから、そうやって焦ってみんな無理やりやらなきゃいけない。もっと積極的な意味を持たせていないからですよ。

だから、建築でいえば、今回の新国立でもプランは全部屋根をソーラーパネルになって

いるわけ。あれはあれで電力の自給をやって、負荷をずっと抑える。あんな巨大な空間を冷房するんだから、ばかじゃないかと思うけど。でも、それはコンサートのような営業は必要なんだよ。だけど、その電力は広大な屋根面積の太陽電池によって賄いますと言うと、環境負荷を抑えることになるから、巨大プロジェクトでもある程度相殺するわけ。

いずれにしても、第5章はもう1回研究し直して、さっき言ったように、見方を変えろとか、いや、プライオリティーのやり方をとか、そういう第5章の思想をどういう形でやるかというのは、重点プロジェクトでもリーディング・プロジェクトでも、そのどちらでもないやり方もあり得るという選択肢も含めて、重点でいくか、リーディングでいくか。

ただ、僕が言っておきたいのは、ただ重点というのはほんとうは意味ないんです。それならもうなしでいいです。事業も全部前に書いてあるんだから。重点とかリーディングって入れるということは、やっぱりそれで引っ張っていかうとか、よりこういうイメージを鮮明にしたい、もうちょっと言い方を変えると、庁内にいろんな役割を担っている部や課があって、みんなきっぱりしなきゃいけないのに全部入れちゃったと。前のほうはな。だけど、これじゃな、多摩川プランの仏が入らない、魂が入らないよねと、みんな羅列の事業だから。これは昔の弱い企画部のやり方なんだ。各部門で出してきたやつを全部集めて、ホチキスでとめたんだ。それで総合計画と称した。そんなの何の意味もない。計画っていうのはやっぱりほんとうに10年なら10年、5年なら5年に実現しなきゃいけないから。それには効率的に有機的に結びつけて、事業というのを進めないといけないんだ。

ところが、行政はみんな縦割りだから、よそから言われたことをやらないんだよ。だから、それをまとめて力にするというのが計画策定のここの責任なんだよ。

【事務局】 それで、前回お見せした、A3でこういう事業がありますよというのをお見せしたと思うんですが、あれが、正直言って、うちがもう全部やっていきますよ、できますよというものなんです。

【進士委員長】 印象にないけどね。じゃ、それを、それがちゃんと論理的に成り立つようにつくってごらん。

【事務局】 はい。わかりました。

【進士委員長】 そして、前段のこれまでのプランと新プランとの関係というのも、それに結びつくようにちゃんと論理展開してやればいい。

【事務局】 わかりました。

【進士委員長】 はい。僕がちょっと、とにかく心配なもので余計なことをいろいろい

いましたが、寺尾さんと齋藤さん何かございましたら。

【齋藤委員】 それじゃ、こういうすばらしい案ができてきたときに、これちょっと使いたいんですよね。使える資料として、今までいろいろ説明があったので、いろいろ質問されているんです。ちょっと思いつきで申しわけない。今、2ページ目の水量の関係ね。今まで過去、どのぐらいの水害があつて、多摩川ではこのぐらいはらんしたんだよという、そういう身近な写真か何かはどこか、防災対策として載せてもらいたい。これが1つね。

【進士委員長】 データ編をつくるという手はあるね。

【事務局】 はい。準備、写真はちょっと今のところあまりないです。

【齋藤委員】 いや、何か、あつ、こんなだったんだなというのが、今の多摩川だけじゃ想像つかないんです。写真か何か入れば。それから、経過の話を少し言いますと、6ページのところの生命の再生という点で、「お魚が結構増えているのね」ってよく言われるんですよ。それは、僕ら漁協の人たちとの関係で、20年以上も前から交流がずっと続けられていたのね。その成果が今出ているんだよということを、僕ら子供たちには説明するわけ。あんなに泡ぶくで死の川が、ほとんど、下水が処理されたぐらいで魚がこんなに増えるはずがないということをお子たちに認識させたい。

だから、そういう意味で、どのぐらいの量をどうというふうな形で放流していったかというのは、漁協の資料があるんだけど、厚生副大臣とこの間ちょっと話し合ったことがあるんだけど、環境副大臣、川崎の出身でしょう。

【齋藤委員】 あの方とちょっと話し合ったことがある。これだけ俺たちがやったんだということを主張したいのね。だから、僕らそれは、それはこっちで行政とは違うんだけど、自然に増えたんじゃないよということをおどっかに入れてほしい。

【事務局】 言葉でそれを入れて、参考資料に、これだけ放流していますよというのがあれば。

【齋藤委員】 うん。そういうのがあつたほうがいい。

【事務局】 そういう形で。

【齋藤委員】 どういう魚をね。今、7種類ぐらいですよ、放流しているのは。それしかない。

【事務局】 漁協に。

【齋藤委員】 聞けばわかります。

こういうふうなアユ、ウグイ、オイカワ、ウナギとかね、結構あるんです。7種類ぐらい。だから、7種類ぐらいしかいないですよ、多摩川に。今いるのは何だというと、熱帯魚なんてよく言うんでね、このやろうと思ったんだけど。タマゾン川なんて言う新聞が出ちゃったから、今、子供たちからそういう集中攻撃を受けるのよ。「先生、タマゾン川って何ですか」「タマゾン川なんかねえよ」って言うんだけど、「ほんとうにこんなのがいるんですか」なんて言うから、「ばかなこと言うな」って言っているんだけどね。

【事務局】 今回、それ書いていないんですけど。

【齋藤委員】 いや、書かなくてもいいけど。要するに今いる魚ね、昔からいる魚が増えたのは放流だよということをちょっとつけ加えてもらえば。

特にね、順番に行くと9番目。9番目は多摩川のせせらぎ館から上流の川はきれいになったということよね。これはこれだけの下水道施設ができたということだからね。

【事務局】 はい、そうです。

【齋藤委員】 それだからきれいなので、上流市の立川、青梅、大きな都市はみんな、全部この中に入っているんですよ。これが、ついでだけど、何年ごろから、何年に施工が始まったか、これをちょっとデータとして入れてもらいたい。例えば、とどろきの場合なんかは、これ今8期から10期工事に入っているよね。

【事務局】 はい。

【齋藤委員】 だから、できたときからどんどん毎年工事して、改良して拡大しているのね。

【事務局】 非常に難しいです。

【齋藤委員】 そういうことは難しいんだけど、僕ら口頭で説明しているんだけど、少なくともこういうグラフを出すと同時に、いつごろからこういうものができていって、設備ができていったんだというのが、聞かれたら答えられない。

【事務局】 多分、齋藤さんがイメージされたのは高度処理の話なのかなと。

【齋藤委員】 多摩川、川崎市の下水道完備100%ですかって言われる。100じゃないと言っているんだ。99.6%ぐらいでしょう。「どうしてですか」って言うから、それは説明してあげるんだけど、稲城市なんかまだ96ぐらい。

【事務局】 そうです。

【齋藤委員】 上下いったらどうなるか、ちょっと辺もわからないんだけど、泳げる多摩川ということを狙っているならば、もうちょっとこの辺を説明してほしかったなと思

ます。

それから、10番のこのアユね。アユが増えてきたというのはわかるんだけど、さっき言った放流ね。放流と下水道処理がタイアップして、相乗効果で増えてきたということなんだけど、この辺がアユだけじゃないよね。いろんな魚がいる。

【事務局】 ほかの魚は、でも、数量がわからない。

【齋藤委員】 わからないけども、今、多摩川にこんなのがいる、こういうものを放流して、こういうふうが増えてきたんだよという、その辺をちょっと入れてもらいたいと思います。

それから、先生が大分お話ししましたので、いいんですけれども、16ページのこの写真を見て、つながりを深める魅力ある流域とは思えない。少なくとも源流からここまで河口までの流域がどんなすばらしいつながりを持っているのかということを書真説明でも入れられるなら入れてもらいたいと思います。

それから、さっきの37番の7ページ、先生おっしゃるとおり、8ページの推進の評価課題が55個あるんだけど、これはそのまま続けて、さらにこれを重点的にやるんだよ、これを重点だよというイメージがよくわかりました。だけど、よく見ると、あれも抜けているな、これもあれもという、こっち55個のほうにはいつているんだよね。だから、それでいいのかなと思うんだけど、それにしてもタイトルをもうちょっと整理していただきたいと思います。

タイトルは、すばらしいタイトルが、6ページ、7ページ、8ページのような、そういうタイトルがわかりやすいと思います。私はそんなところです。今思いつきで申しわけない。

【進士委員長】 じゃ、寺尾さん、どうぞ。

【寺尾委員】 私は、委員長おっしゃったとおり、14、15、16ページのこの写真、挿絵の形態というのは、これはちょっと疑問を感じるようなところがあったと思います。1番なんか、この川が水量増したらちょっと危ないような川になってしまうような感じになっていますし、16ページのつながりを深めて云々という項目のところなんですけど、今、齋藤さんもおっしゃられたように、このような形でしたら、上流の小菅村になってしまえますけど、何て言うんでしょうね、発展した部分の下にカニや魚がいっぱいいるよというようなことを書ければなというふうに思っておりますので、その辺をよろしくお願ひしたいと思います。

【事務局】 それは文章で。

【寺尾委員】 いえいえ。

【事務局】 絵ですか。

【寺尾委員】 これは写真のほうがいいですかね。つながりを深める。

【進士委員長】 いや、だから僕がさっき言ったのは、向こうの目標は文章でやらないと、絵を入れたら、もう途端にその絵のイメージになっちゃう。それだけしか見えなくなる。

【事務局】 あっ、逆に、それについては、後のほうのページの、例えば33ページのところにそういう部分の絵を入れていくようなイメージ、こちらにはイラストですとか入れないで。

【進士委員長】 そうそう、だから個別の。

【事務局】 個別のところ。

【進士委員長】 個別の代表とか象徴的な仕事を幾つか並べるのはいいよ。だから、どちらかという、それが、もう既にやったんだけど、その前の川崎っ子だの何だの5ページにあるでしょう。5ページにやたら写真がいっぱいあっても、ほとんどこれは終わっている、さっき言ったように。ここをぐっと逆に抑えて、こういう写真は逆に後ろで使ってもいいんですよ。

【事務局】 はい。

【進士委員長】 そういうこと。普通はね、プランというのはできていないときだから、よそのところとか、よその町とか、極端に言うと、今の外国の絵を入れちゃうんだよ。これは最も後進国的で植民地的だからやめてほしいのね。だけど、ここは全部実績を持っているから。実績でそれをより充実するんだけどもという前提で、ここに散りばめるのはいいんだよ。各ホームレスの自立支援策の推進とか、何を入れるか知らんけどさ。

【事務局】 いや、あまり入れられないです。

【進士委員長】 だから、そういうものを入れたいならよ。絵じゃないとわからないから絵は入れるんですよ。公式文書というのは本来は絵は評価されていないんだよ。みんなわかっていないんだ。公文書館に入るのは全部絵じゃないですよ。絵も図面もだめなんですよ。文字しか日本は、行政法的にはね。

【寺尾委員】 あと、全体を通して、川というのは、森と川と海をつないでいるんだというイメージ的なものが、文章の中に川だけが抽出されているなという気が非常にするん

ですけど、いかがでしょう。

【進士委員長】 そうね。それはすごく大事だね。先ほど言った時代の要請はそれだよ。だから、さっき言った、市長は他自治体との連携というので、そこだけ心配しているけど、それを拡大すれば、今の話になる。だから、森、川、海の連携というのは環境省も出しているんだけど、生態学の基本中の基本だから。川は森から始まって、海までつながっているの。その全ての生態系を考えなきゃいけないんだから、それは子供の教育だってそうだし、自然の生態系の環境保全だってそうなんだから、それを前面に打ち出してね。

【事務局】 今までがちゃんとしっかり源流研究所と連携をとりながらいろいろやってきているので、その辺の認識は当然あった上で、世田谷だとか、そういう話が出てきているので。

【進士委員長】 だけど、それを書かないとさ。

【事務局】 わかりました。

【進士委員長】 ここまで終わっていますからって、あなたしか知らない。これ読んだ人はプランの中身で見るからね。さっき言ったように、美しい多摩川とか書いてあるよね、目標の1番目。そういうところもそういうことを書いてもいいんですよ。

【事務局】 その間にできた話として、農大さんがやった源流大学ですとか、そういうものを入れながら言葉でそういうふうに発展していくというのを……。

【進士委員長】 ま、別に農大のは入れなくていいけど。

要するに、もう1回言うけど、市民とか企業とか新聞記者とか、そういうのが新プランというのは、ああ、そうなんだという、その理念、フィロソフィーから始まって、目標は理念を書いているわけで、あとの具体的な事業が並んで、それを読むと、ああ、これはほんとう必要だねとか、ああ、そう、でも、これはこういう見方で見ると、ほんとに大事なんだなって納得できるようにしなさいと言っているわけ。それを意識して書けばいいんですよ。これはどうだ、あれはどうだと個別の話じゃなくて、そういう意識をあえて持ってやればいい。寺尾さん、ほかには。

【寺尾委員】 あと、すいません、ちょっと小さいことで申しわけないんですけども、28ページの実施事業の4行目の「殿町3丁目」の「町」は、これは文章の前後からいくと、1丁、2丁の「丁」の意味になると思いますけど。

【事務局】 はい。

【寺尾委員】 先ほど申し上げたように、ほんとに森、川、海という形でつなげていっ

ていただければなというふうに思っております。よろしくお願いします。

【事務局】 連携のところで森、川、海というようなフレーズを入れながら、少し文章構成していきたい。

【寺尾委員】 よろしくをお願いします。

【事務局】 5のところですね。

【寺尾委員】 はい。

【進士委員長】 ほかはどうでしょう。ワーキングから質問ありますか。

【寺尾委員】 ちょっと細かいことで思いつきでごめんなさい。37ページの宇奈根のせせらぎ水路の整備というのは、場所はどの辺なんですか。

【事務局】 東名高速道路の橋のちょっと上流です。

【寺尾委員】 上流？ あの湧水がわいているところですか。

【事務局】 はい。

【寺尾委員】 わかりました。

【齋藤委員】 そこに設置するわけね。ちょっと整備すればいい。

【進士委員長】 これは何やるの、これ。水路を整備したの？

【事務局】 そこほんとうは護岸の整備をするんですけども、護岸の整備に際して、湧き水が出ているので。

【齋藤委員】 湧き水が流れているんです。

【事務局】 はい。活用して。

【寺尾委員】 それが見えなくなっちゃうことはないんですか。

【事務局】 せせらぎをつくるんですね。

【進士委員長】 河川敷の中に湧水のせせらぎをわざわざつくるの？

【事務局】 そうです。

【齋藤委員】 ここ下りたところに湧き水が出ているんです。

【進士委員長】 ま、それはそうでしょうね。本流とは全然無縁なの？

【齋藤委員】 ええ、ちょっと離れている。

【事務局】 伏流水は伏流水だと思います。

【進士委員長】 水はここでたまっているだけ？

【事務局】 いえ。

【齋藤委員】 ここへ小魚が上ってきているんです。産卵もしているんです。ここ、い

っぱいがば一っと、あそこ曲がっているんですよ。そこを一発さらわれたらどうなっちゃうか。それが心配です。せせらぎ館の上流のビオトープと同じように、ぱっとさらったら自然に池ができちゃったという、なっちゃうのかな。

【進士委員長】 大河川はそういうもので、毎年新しくなるものなんだよね、本来は。

【齋藤委員】 そうなんです。ちょうど蛇行する一番被害の大きいところなんです。その辺を頭に入れて、できちゃったら流れちゃった。

【進士委員長】 最後に、山道さんの意見をちゃんと紹介しないと。

【事務局】 はい。①につきまして、このプランの骨子は、多摩川らしさの復活、多摩川らしさを満喫した利用の促進をどうするかであろうと考えます。このとき肝要なのは多摩川らしさをどう捉えるかです。

かつて首都圏が高度成長期にあったころ、町から子供の遊び場、ワンダーランドであった原っぱが消えようとしていました。このとき多摩川の河原の原っぱを何とか残そうとする運動が1970年代、貴重な動植物がいなくても、多様な生物相、広々とした水辺の空間や景観の存在が、高密度市街地にあっては貴重だということです。これには片や、河原はもっと有効利用ができるはずだ、町中に足りないグラウンドや野球場をつくらうとする動きが推進されておりました。

この論調は全国に広がり、市街地の川や水路のあり方にいまだ大きな影響を与えています。多摩川プランの策定の議論の中で私がこだわったのは、川らしい利用のあり方はどうあればいいのかでした。自然的にも文化的にも川とその周辺の住民との関係は密接なかわりを持ちます。まず、多摩川を理解し、都市河川としてどういう姿が望ましいかを考えています。

次に②、前回の会議の際に、サイクリングロードのあり方も議論になっていました。この高速で走るサイクリングは事故が多発しているとの情報で、少し調べました。その結果は下表のとおりですが、驚いたことに各市区の施設管理者の回答のうち、府中市は重大な事故が多発したため、サイクリングロードに警告の看板や減速を促すための設置の要望があり、施設管理者が把握していました。

他の市区は、そもそもサイクリングロードが未整備であるため、回答なし、または警察に聞いてほしいとのことでした。地区の警察への問い合わせでは、教えられないとの一点張りでした。

ただし、注目すべきは府中市の経過で、平成24年から26年にかけて毎年4～7件、

警察沙汰になっている件です。おそらく軽い事故はそれ以上ではないかと考えます。川崎市も上流地区での例を調べていただき、参考にされたらどうでしょう。サイクリングが全くだめと申し上げるわけではありません。多摩川の雰囲気や景観を楽しみながら走る工夫等を検討いただき、事故のない空間利用を望みたい。ご議論の参考になれば幸いです。以上でございます。

【事務局】 1番については、うちのほうは新たに運動場をつくるとか、そういうイメージは全くなくて、多摩川の現状をどういうふうに保全していこうか、確保していこうかなど、ある運動施設をどういうふうに有効に使っていこうかというような形で考えているところでございます。

2点目については、ちょっと府中市が特例でございまして、サイクリングコースがかなりうねっていて、おまけに緑が入っていて、ブラインドの部分がたくさんございます。そこで、おじいさんと高速で走っている自転車だと思ったんですけど、そこで死亡事故があったかと。

川崎市も安全管理という部分では路面表示をしたり、ここは交差する部分ですよというような表示をしたり、あと通行についても、こういうふうに考えますよというのは警察のほうといろいろ協議をさせていただきながら、今、どんどんやっている最中です。

ほんとうは施設よりもマナーなんで、ほんとうはマナーがちゃんとできれば、それでいいんですけど、なかなかマナーだけで言うわけにいかないんで、行政は、逃げになってしまうかもしれないんですけど、やっぱり設備をちゃんと整えておく必要があります。

【進士委員長】 いや、ヨーロッパの町は確かに自転車のほうが交通量多いぐらいなんだよ。それはわかるんだけどね。

【進士委員長】 さっきの山道さんのでね、やっぱり河原で遊ぶという体験、原体験を与えたいというのは、もちろんよくわかるんですね。ただ、大規模河川でちょっと危険性があるって、普通の中小河川と違うのでね、多摩川でいいかどうかは別なんだけど、確かにこういう暑いとき、橋の上を歩いて僕らは川に入ったものですね、昔は。そういう体験というのは、さっきのせせらぎという、宇奈根の湧水がある、そういうところでちょっとやるとか、子供が川に行くことをなるだけ、昔は排除していたんだからね。これから少しやらなきゃいけないとしたら、それは安全性。河原って体験は全然町中と違う。

【事務局】 深くならないようにやはり工夫もしていますし、植栽をある程度残して、木陰をつくるような配慮もしてもらおうように考えています。

【進士委員長】 いいですか。

【事務局】 はい。ありがとうございました。

【進士委員長】 お2人はぜひ具体的なところをもうちょっと入れてください。

【事務局】 そうですね。どんだんご意見をいただければと思います。

次회가8月18日、推進会議になりますので、今回いただいた宿題についてもこういうふうに整理をさせていただきましたという報告からスタートさせていただきたいと思っております。

【齋藤委員】 18日ですね。

【事務局】 はい。

【事務局】 本日は貴重なご意見、いろいろ、第2次ということで新しい多摩川プランに向けて、皆さんの今までNPOとか協働とか連携とかという言葉、今度2次では自立みたいな形で、そういう形でできればというふうに。

【進士委員長】 ぜひ、市長の挨拶。その案でいいんですけどね。僕は次回それがあって、その流れがずっと来て、全体像をやれば。ディテールの事業はそれぞれの部局のを入れて、皆さんが総合判断して、ちょっと組みかえをまたお願いすればいいわけですね。大体いい線まで来たと思うよ。

【事務局】 ありがとうございます。

【進士委員長】 だから、次の会、期待しています。

【事務局】 ありがとうございました。